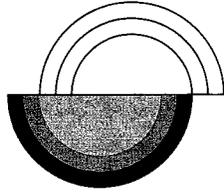


7th International RILEM Conference on
Self-Compacting Concrete/1st International
Conference on Rheology and Processing of
Construction Materials/67th RILEM
week－参加報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/42228



7th International RILEM Conference on Self-Compacting Concrete/1st International Conference on Rheology and Processing of Construction Materials/67th RILEM week—参加報告

国際情報

五十嵐 心 一*

1. 会議の概要

本稿タイトルのとおり第7回自己充填コンクリートに関する RILEM 国際会議、第1回建設材料のレオロジーと製造工程に関する国際会議、そして年次恒例行事である第67回 RILEM ウィークと、3つの研究集会を兼ねた学会が、2013年9月1日から4日の日程で、フランスはパリ市内、6区のピエールマリキエリ大学 (UPMC) の会議施設 Les Cordeliers で開催された。会場はパリの5区と6区にまたがるカルチュラタン地区の一角にあり、ノートルダム大聖堂やルーブル美術館も徒歩圏内で、空き時間に観光もできる絶好のロケーションであった (図-1)。ソルボンヌ大学や UPMC の学生が行き交う表通りから、一歩裏の路地を入ればそこには閑静なアパートマンがあるという環境で、最もパリらしい地域といえそうな所で



図-1 会場ロケーションと観光地の位置関係

あった。

配布資料によると、参加登録者数は291名で、地元フランスはもとよりヨーロッパ各国からの参加者で多数を占めるのは当然であるが、日本からの登録者数は6名であった。やや物足りない気がしないでもないが、今回の会議のテーマと我が国の研究動向を考えると、これもむべなるかなという思いである。

2. 会議の内容

主催者発表によると、会議へのアブストラクト投稿は300件ほどあり、その中からピアレビューを経た48編の論文が冊子体のプロシーディングとして発行され、その他の査読を経ない160編の論文がCD版プロシーディングに収められたとのことである。

第2日午前の開会式では、本会議の実行委員長である Nicolas Roussel 氏 (IFSTTAR; フランス中央土木研究所)、RILEM 会長である Mark Alexander 氏 (ケープタウン大学)、そして Bruno Godard 氏 (フランス土木学会) が開会の挨拶を述べ、その後、Philippe Coussot 氏 (Laboratoire Navier (IFSTTAR を含むいくつかの研究機関の連合体)) が「建設材料のレオロジー」と題する基調講演を行い、実質3日間の大会の幕を開けた。

3つの会場に分かれて一般講演15分、基調講演や招待講演は30分の割り当て時間で会議は進行していった。3つの研究集会の発表が並行して進行していくため、プログラムを見て入った会場の発表が、いったいどの研究

表-1 RILEM ウィーク招待講演一覧

講演種類	講演者	講演題目
ロバートエルミートメダル受賞講演	John L. Provis	GEOPOLYMERS AND OTHER ALKALI ACTIVATED MATERIALS -WHY, HOW, AND WHAT?
委員会報告	Z. P. Bazant	Report of TC 242-MDC (Multi-decade creep and shrinkage of concrete)
委員会報告	K. H. Khayat	Report of TC 228-MPS (Mechanical properties of self-compacting concrete)
委員会報告	L. Ottosen	Report of TC 229-EPE (Electrokinetic processes in civil and environmental engineering)
委員会報告	C. Pellegrino	Report of TC 234-DUC (Design procedures for the use of composites in strengthening of reinforced concrete structures)
委員会報告	J. Weiss	Report of TC 214-CCD (Concrete cracking and its relation to durability)
委員会報告	P. Nixon	Report of TC 219-ACS (Alkali aggregate reaction in concrete structures)

* いがらし・しんいち/金沢大学 教授 (正会員)

集會に属する研究発表なのかよくわからないという感じだった。また、欠番の講演もかなり多く、聴衆もまばらというセッションも少なからずあった。それらの空き時間を埋めるように、途中に飛び入りの研究発表や著名な研究者の話題提供が組み込まれていたりした。

それらの研究発表とは別に、RILEM ウィークの恒例であるロバートエルミートメダル受賞講演と各研究委員会（テクニカルコミティー；TC）の活動報告を行う講演が組み込まれていた。今回の講演は表-1のとおりである。受賞講演がジオポリマーに関するもので、また、この国際会議中の発表論文にもジオポリマー関連のものが多数あって、建設材料分野におけるセメント代替、CO₂削減の意識の高揚を強く印象付けられた。また、かなり年配の著名研究者が、いまだにかくしゃくとして最先端の研究委員会を牽引する姿勢に深く感心させられた。

3. 学会の楽しみ

RILEM ウィークに参加する大きな楽しみは、TCに参加することである。今回も前回の開催地ケープタウンに引き続きTC 225-SAPの委員会がリュクサンプール宮殿近くのEcole des Minesで開催された。日本からは大分高専の一宮一夫教授と筆者が出席した。この委員会は新しい材料である超吸水性ポリマー（SAP）の新たな利用法を探ることを目的としている。これまでに、共通の材料と配合に基づいて自己収縮抑制に関するラウンドロビン試験を実施し、その結果をRILEMの論文誌（Mat. & Struc., DOI 10.1617/s 11527-013-0078-5）に発表している。今回はラウンドロビン試験の第二弾であるSAP使用コンクリートの耐凍害性を調べる試験の進捗状況について話し合われた。こういう試験に参加すると、自分のところでやったデータが他の研究機関のデータと大きく離れていたらどうしようとか昔はヒヤヒヤしていたのだが、歳を重ね顔見知りの委員も多くなってくると「金沢大学のデータが異常ではないか？」といわれてみんなの視線を浴びても、「ああ、そうですね。今やり直していますので」と適当に言い訳をつけて流せるようになった。年に1回の顔合わせで、これまでの経緯を把握していない委員も参加したりするので、過去に遡っての説明があったりで、思い出しながら会議内容をフォローできる。気軽な雑談風に議論が進むいつもの温かい雰囲気のまま委員会は終了し、その後皆で記念写真を撮って散会となった（写真-1）。

今回もう一つ楽しみにしていたのがバンケットである。パリという開催地でそれなりの参加費であったので、どんなフランス料理かと期待して出向いた。バンケットの会場はオペラ座近くのデパート、プランタン・オスマン本店6階の「ブラスリー・プランタン」であった。大きなステンドグラスの円天井の下に雰囲気のいいレストランがしつらえてあり、多くの参加者がその美しさに何度もシャッターを切っていた（写真-2）。筆者は宴会



写真-1 研究委員会 TC 225-SAP 会議終了後

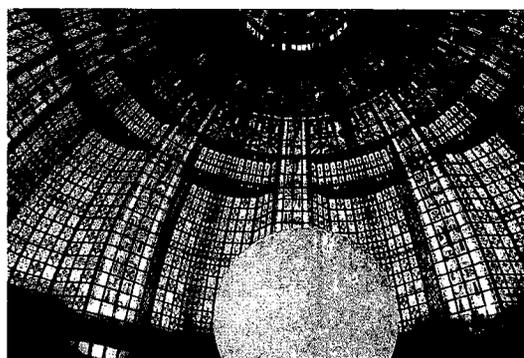


写真-2 バンケット会場中央のバルーンとステンドグラス

表-2 今後のRILEMウィーク開催予定

開催年	開催地	開催期間
2014	サンパウロ（ブラジル）	8/31～9/5
2015	メルボルン（オーストラリア）	8/30～9/2
2016	コペンハーゲン（デンマーク）	8/21～24
2017	チェンナイ（インド）	9/3～6
2018	デルフト（オランダ）	9/2～5

の楽しい雰囲気にもまれてワインが進んでしまい、結局、肝心の料理の内容を覚えていない。今どきの若い人たちのようにすぐに携帯を出す習慣があれば、本稿を書いている今になって悔やんでいる。

4. まとめ

13年ぶりのパリ訪問であった。昔NHKの人気ニュースキャスターが世界にはぶらぶら歩きに堪える街というのがいくつかあるといい、確かパリはその一つであったと記憶している。今回は出張前後のスケジュールの関係で、パリを住んでいるように歩くことができ、個人的にはそのことが実感できる出張となり楽しかった。

RILEM ウィークは毎年開催地が変わり、併催の国際会議の内容も異なるが、開催時期がほぼ決まっていて、スケジュールが立てやすい。開催地は必ずしも欧州に限らず、今後の開催予定は表-2のとおりである。もし行ってみたい都市があったら、それを目的に学会に論文投稿するというのはいかがだろうか。動機としては本末転倒であろう。でも、大きな声では言えないが、私はそうかもしれない。